

### Ⅲ. 特殊学級及び通常の学級での指導

藤田直子 廣瀬由美子 肥後祥治 柘植雅義

#### 1. はじめに

B小学校には、情緒障害特殊学級と言語障害特殊学級（以下言語学級）があり、学習障害（以下LD）や注意欠陥／多動性障害（以下ADHD）の疑いがある児童は、主として言語学級に在籍して学習をしている。このような児童に対しては、特殊学級での学習より通常の学級との交流の時間（以下交流学級）を多くし、特殊学級担任が交流学級に行きつてティームティーチング（以下TT）の形態で指導や支援を行う等の配慮をしている。また、在籍はしないが、言語学級を週1～2時間程度利用して学習しているADHDの児童もいる。

B小学校は、平成11年度より本プロジェクト研究の研究協力校として、研究所のスタッフと月1回程度、LDやADHDの疑いがある児童の指導方法について、協議を重ねてきた。そこで、本報告では、LDやADHDの疑いがある児童の指導方法について、特殊学級での指導と交流学級での指導を中心に、交流学級担任との連携の視点からまとめていく。

#### 2. 対象児童の概要

F児（現在小学校5年生男子）は、田中ビネー知能検査、WISC-Ⅲ、ITPAを実施した結果から、LDの疑いがあると思われる児童である。音読はすらすら読めるが、吃音があるために、日常会話は音の繰り返しが頻繁である。漢字の書き順は正確ではないが、読み書きはほとんど習得している。しかし、物語の情景や登場人物の気持ちを読み取ったり、作文を書いたりすることは苦手である。算数は得意であるが、1桁の計算は指を使って行っている。また、体育の基本的な運動は非常にぎこちない動作が多い。授業中は一方通行的な話を頻繁にするため、教師や友達から注意されることが多い。日常生活では、状況判断が素早くできないために行動が遅くなり、友達や教師の支援が必要である。

G児（現在小学校5年生男子）は、F児と同じように田中ビネー知能検査、WISC-Ⅲを実施しているが、心理検査や行動観察の結果から、ADHDの疑いがあると思われる児童である。軽度難聴のため補聴器を使用している。科学的な知識は大人顔負けである。好きな活動には熱中するが、規律やルールが守れず友達から注意される場面が多い。授業場面では、反応が

早く、教師が質問するなりすぐに答えてしまい、担任は困っている現状である。授業中に話を聞く場面や自力解決の場面では、物をかむことが多い（つめ、消しゴム、袖口、教科書やノート、名札など）。日常生活の場面では、その場の雰囲気や相手の気持ちを考えることが苦手なため、自分の思いを通そうとして友達とトラブルになることが多い。

#### 3. 児童のニーズと個別の指導計画

児童の個別の指導目標を設定するにあたり、保護者と交流学級担任に対してニーズ調査を実施した。また、S-M社会生活能力検査等の結果を含めて、保護者、交流学級の担任、言語学級担任の共通のニーズを把握し、個別の指導計画を立案した。ここではF児を例にして報告する。表1はF児が3年生の時（平成12年度：本研究プロジェクト2年次）の個別の指導計画である。

#### 4. 特殊学級（言語学級）での指導

F児、G児を指導するにあたり、言語学級担任の主な役割は以下の4つと考えて支援にあたっている。

- ① 対象児らが通常の学級に適応するために必要な技能の習得を支援する。
- ② 対象児らが通常の学級に適応するために適した環境作りをする。
- ③ 対象児らが交流学級で学習や生活をする場合に、必要な支援をする。
- ④ 交流学級の担任及び学級の児童に、障害がある児童への理解が深まるような情報を提供する。

そこで、言語学級では、個別の指導計画をもとに、集中力を高めることとコミュニケーションの技能を高めることを優先課題として、「よく見ること」「よく聞くこと」「発言のルールを守ること」について指導した。

表2に、F児の個別学習の目標と学習方法及び評価についての概要を示す。

個別学習の内容については、交流学級担任と情報交換を行い、毎学期ごとに成果や課題を確認しあった。以下は、交流学級担任のF、G児に対する感想である。それによると、①朝の漢字学習の取り組みが熱心にできた（G児）、②集中できるようになったので、計算が短時間でできるようになった（G児）、③手を挙げるようになった（G児）、④教えてくださいとか聞いていいですかと言えるようになった（F児）、⑤集団行動に遅れなくなった（F、G児）、⑥授業中自分勝手に発言

表1

## 平成12年度 第1学期 個別の指導計画

学年	3年	氏名	F児	作成日	H. 12. 4. 21	作成者	藤田 直子
		目 標		主 な 指 導 内 容			指導場面及び指導形態
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 技 能	・話を聞くとき、勝手に質問せず、最後まで黙って話を聞くことができる		・「お話をしよう」の活動を通して、定着を図る ①3分程度の話を聞くあいだの状況をテープに録音し、私語の有無を自己評価する。 ②話をする人からの遠近により、4段階のレベルを設定する。 ③私語0が3回続いたら、レベルアップする。 ④交流学級での学習の様子を録画し、私語の有無を自己評価する。			ことば 一小集団	
	・発表のルールを守って発表することができる。		・「お話をしよう」の活動を通して、定着を図る ①指名を待つときは、手を挙げて待つ。 ②「はい～です」「はい～と思います」という答え方をする。 ③友達の発表が終わるまで、黙って聞く。 ④話題に合わない受け答えのときは、言い直しをする。			ことば 一小集団	
	・自力解決が困難な課題に向かったとき、適切な質問の仕方ができる。		・「パズルゲーム」の活動を通して、定着を図る ①最初の10分は質問せず、考える。 ②残り5分は質問していい時間とし、手を挙げて「先生」と呼ぶ。 ③質問は、小声でする。			ことば 一小集団	
	・不明瞭な発音が分かり、正しく発音することができる。		・詩の音読を通して、正しい発音に近づける ①「ぎ・ぜ・ぞ」と「だ・で・ど」の聞き分けの練習をする。 ②正しい舌の使い方を練習する。 ③詩は、発音の仕方の難度により、レベル分けしておく。 ④詩の朗読を録音し、発音の正誤を自己評価する。			ことば 一個別	
	・吃音を和らげる方法を身につける。		・動作法で上半身の緊張を和らげる。			ことば 一個別	

## 援助指導計画

(交流学級担任 T教師)

		目 標	主 な 指 導 内 容	援助者
日 常 生 活 技 能	・身支度や自分の持ち物の出し入れが決められた時間でできる。		・ランドセルの用意をするとき、時間割の順番に従って入れる。 ・上履きが昇降口で履けるように、靴箱に指示カードを入れておく。 ・登校後の準備の手順と時間を掲示する。 ・学習の準備と片付けのルール明確にする。 (特別な場合は、黒板に書く。)	母親 藤田 T教師・藤田 T教師
	・箸を上手に使うことができる。		・豆つかみの練習をする。	母親
	・雑巾を上手に絞ることができる。		・雑巾の絞り方を練習する。	母親

することが減った (F児) というように学習効果が認められる記述があった。

対象児ら自身は、言語学級での学習を①楽しい (F、

G児)、②落ち着いてできる (G児) と言っており、言語学級で学習したことは③自然に役に立っている (F児) と自己評価していた。

表2 F児の個別学習の目標と学習方法及び評価

課題	目標	学習方法	評価
ドミノを並べよう	・指示に注意を向け、指示通りにドミノを並べることができる。	5色のドミノの並べ方を音声で「赤・青・黄」と指示したり、色の配色カードで視覚的に指示したりする。児童は指示に注意を向け、指示通りにドミノを並べる。	音声指示では正確にドミノを並べることができたが、視覚指示では、誤りが多かった。週1時間ずつ約3ヶ月学習を続け、4色の視覚指示を正確に並べられるようになった。
迷路ができるかな	・迷路のスタートからゴールまで、一定の時間は私語を挟まずにやり遂げることができる。 ・5～8mm幅の迷路中を両側の線に触れずに通過することができる。	迷路は、市販されている一般的なものを使用した。実施回数が進むにつれて、迷路の難度が高まるように設定したので、黙って活動する時間が徐々に長くなる。	実施回数が進むにつれて難しくなり、所要時間は長くなっているのに対して、私語は減少した。周囲の線に接触した回数も減少し、集中力が高まった。
ジグソーパズルで遊ぼう	・一定時間は自力解決し、その後は、ルールに従って援助を求められることができる。	動物の写真を4～12ピースに分割したパズルを作成した。ピースの形は三角形と四角形である。10分間は自力解決し、その後は、挙手して援助を求めてよいこととする。	最初のころは、パズルに慣れていないせいもあって、私語が多かったが、慣れてくると10分間は黙って実施することができた。援助を求めるときには手を挙げることも定着した。
お話をしよう	・話を聞くときは途中で質問せず、最後まで黙って聞くことができる。 ・発表や質問は、手を挙げて待ち、指名されてから答えることができる。	3分程度の話を聞く間の状況を録音したり、交流学級での学習の様子を録画したりしたのを見たり聞いたりして、私語の有無を自己評価する。また、話しの内容について、ルールを守って質問したり答えたりする。	録音や録画したものを通して自己評価ができたので、改善しようという意識が高まり、私語が減少した。挙手をし、指名を待って発言することも定着した。しかし、交流学級での定着は、完全ではなかった。
動物になって散歩しよう	・音声指示に従って、散歩コースを指示通りに進むことができる。 ・友達の活動の正誤を正確に記録することができる。	5m程のコースに手型と足型が貼ってあり、そのコース上を「手、足、足、手・・・」という音声指示に従って進んでいく。友達が行うときには、その様子を良く見て、正誤を記録する。	音声指示に従って進むことはすぐにできるようになった。しかし、正誤の記録は、活動の後半に間違いが見られたので、週1時間程度、約3ヶ月学習を続け、正確に記録できるようになった。

## 5. 交流学級（通常の学級）での指導

言語学級担任が、対象児らの支援者として交流学級に入る場合念頭に置いていたことは、対象児らが友達と良い関係作りができるように配慮することや個別の学習で高められた力が交流学級で上手く使えるようになったかを評価することであった。後者については、「4. 特殊学級（言語学級）での指導」で、対象児らの変容について述べてきたので、ここでは、前者の友達関係の調整による効果について報告する。

交流学級での授業展開はグループ学習の形態が多く、その際に、言語学級担任は、対象児らと友達の意思疎通の調整を行い、適切な行動のモデルを示した。また、言語学級担任は対象児のみに関わるのではなく、一般的なT Tとしての役割も果たした。一般的なT Tとし

での関わり方をすることで、他の児童にとっても有益な支援ができ、さらに、対象児らが特別視されることを防ぐことも可能であった。このような支援で、対象児らはグループの一員としての責任を果たし、友達とのトラブルも無く学習することが可能となった。

一斉指導の場面では、できるだけ行動や学習の自己管理ができるような支援を行った。例えばシールの活用、開始と終了の時刻の表示、机とは別の作業スペースの確保などである。これらのことによって対象児らには、①課題が最後までできるようになった、②学習のペースをつかむことができた、③自分の状況に合わせて学習の場を選ぶことがあった等の支援の効果が見られた。交流学級担任は、①一斉の学習形態で対象児らが理解できない点を補ってもらえた、②他の子どもにも関わってもらえたので助かった等、肯定的に評価

してくれた。

## 6. 交流学級（通常の学級）担任との連携

F児、G児は交流学級での学習が中心なため、交流学級担任と綿密に連絡を取り合うことが重要であった。研究所のスタッフからの情報を交流学級の担任へ提供することで、担任は、板書の工夫や発問の工夫、学習環境の工夫等をして、対象児らに分かりやすい学習を展開してくれた。さらに、言語学級担任と一緒にLD等の研修会にも参加し、障害がある児童を理解しようと心がけてくれた。また、言語学級担任は、交流学級で対象児らに直接支援したり、交流学級の担任と協議したりすることで、対象児らの交流学級での実態や課題を知ることができ、個別学習にフィードバックして生かすことができた。

言語学級担任と交流学級担任が協議した結果、交流学級担任が行った主な支援を表3に示す。

## 7. まとめ

今回の研究においては、対象児らのニーズ調査や心理検査、授業中における行動観察から得られた情報をもとに個別の指導計画を作成し、研究所のスタッフと協議しながら支援方法を考えることができたので、対象児らのニーズに応じた指導や支援を行うことができた。支援の効果についてもスタッフと共に評価していき、一つ一つの支援が、言語学級と交流学級においてそれぞれが関連しあって効果を高めることが可能であった。

対象児らの優先課題については、言語学級での個別学習を通して学習効果が認められ、対象児らは、交流学級での学習にも適応できるようになってきている。交流学級での適応が上手くいったのは、言語学級での学習によるものだけではなく、言語学級担任が交流学級でTTとして支援を行ったことによる効果も大きいと考えられる。言語学級担任は、交流学級でTTとして支援しながら、対象児らの学習効果を確認することや、新たな学習課題を把握することができた。そうし

表3 F児G児に対する交流学級での支援

<b>刺激の少ない環境作り</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 座席は前列の端にする。</li><li>・ ロッカー側の座席のときは、空きロッカーを荷物入れに使用してもいいことにする。</li><li>・ ロッカー側でないときは、収納ケースを使用してもいいことにする。</li><li>・ 学習用具で普段使わないものは、集めて保管する。（全児童）</li><li>・ 学習の始まりや終わりに、机上の整理をするように声掛けをする。</li><li>・ 凶工など、作業スペースがたくさん必要な学習では、広い机を使用してもいいことにする。</li><li>・ 課題が早く終わった児童がやるべきことをはっきりさせておき、落ち着いた学習環境が持続できるようにする。</li><li>・ 学習コーナーをいくつか用意しておき、学習進度の違いによって、学習の場を選んでよいこととする。</li></ul>
<b>分かりやすい指示、分かりやすい情報提供</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 大きな声でゆっくり話す。</li><li>・ 順序良く話す。</li><li>・ 何について話すのか、話しのポイントがいくつなのか最初に伝えておく。</li><li>・ 話し始めるときは、注意が向くように声を掛ける。</li><li>・ 学習課題やまとめは、色分けして板書する。</li><li>・ 学習の順序に従って、右から、左から、上からというように規則正しく板書する。</li><li>・ 学習の終了時刻は、板書して明示する。</li><li>・ 板書の内容は精選し、文字数をできるだけ少なくする。</li><li>・ 理科や算数は、「学習の進め方」をあまり変更せずに進める。</li></ul>
<b>自己管理ができるような工夫</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 漢字の小テスト、ドリル、算数の単元末ワークシートは、合格シールで進度が確認できるようにする。</li><li>・ 日程や時刻の変更は、板書しておく。</li><li>・ 掃除や給食当番表は、一人一人の仕事内容がわかるような掲示にする。</li><li>・ 作品や学習用具を持ち帰るための紙袋は、あらかじめ用意しておく。</li><li>・ 学習用具がたくさん必要な学習の場合は、机の上や周りのどこに何を置くか決めておく。</li></ul>

### 成功経験を多くするための工夫

- ・手を挙げたら必ず指名し、手を挙げないときは指名しない。
- ・課題の最後に間違いを訂正するのではなく、途中で確認し、間違いがあったらその都度訂正するようにする。
- ・作文は、原稿用紙1枚から数枚程度とし、児童一人一人に個別の目標を持たせる。
- ・ドリルなどは必ず終わらせるようにするために、休み時間を活用してこまめに指導する。
- ・言語学級の学習のためにやれなかった実験などは、別に時間を取って指導する。
- ・体育館などへの展示作品はしっかりと仕上がるように十分指導し、そうでないものは本人が満足できれば良いとする。
- ・体育では、能力に合った運動ができるように、学習の場が選択できるようにしておく。

### 友達とのトラブルを避けるための工夫

- ・座席は、関係の良好な児童と一緒にできるように配慮する。
- ・対象児らの隣になる児童は、対象児らの行動に影響されにくい子にする。
- ・友達同士で学び合うときは、上手に教えられる児童とグルーピングする。
- ・対象児らが失敗したり迷惑をかけたときは、担任が適切に判断して注意し、関わった児童が直接注意しない約束にしておく。

て、それらを言語学級の学習に生かしながら、さらに支援することが可能となった。

さらに、言語学級での学習や交流学級でのTTとしての支援といった対象児への直接的支援とは別に、交流学級担任への情報提供のような間接的支援も、対象児への有効な支援方法の一つとなった。言語学級担任は、研究所のスタッフからの情報を交流学級担任へ提供したり、交流学級担任と支援方法を協議したりす

ることによって、交流学級の担任は、対象児らが学習しやすい環境作りを心がけてくれた。

以上のことから、LDやADHDの疑いがある児童にとって、言語学級での指導と交流学級での指導は、いずれも欠かすことのできないものであり、特に言語学級担任と交流学級担任との密接な連携が、その重要な役割を果たすことも明らかになった。